愛媛大学　教育・学生支援機構　英語教育センター

新型コロナウイルス禍における必修英語科目の実践対応事例[1]

1. はじめに

2020年度は，新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための対応が，様々な分野においてなされ，その影響は2021年度にも引き続き及ぶことが予測される。高等教育機関である大学においても，各地域の実情に応じた方法によって対応策が講じられ，その実践事例について，徐々に報告が認められるようになってきた。しかし共通教育としての語学科目については，どのような形態で，またどのような工夫・取り組みでもって対応を行ってきたのか，共有された事例はまだ乏しい状況にある。そこで本稿では，特に，愛媛大学教育･学生支援機構の英語教育センターが行った全学共通教育科目（必修）の「英語」の授業に対する組織的対応を取り上げ，スケジュール編成と遠隔授業の準備，その運用の成果と課題を中心にまとめるとともに，その発展的授業改善の方法を提案することを目的とする。

2. 共通教育基礎科目「英語」（必修）の概要

英語教育センターでは，常勤教員，学内協力教員及び学外非常勤講師の約20名が，初年次学生（約1,850人）を対象に，共通教育基礎科目「英語」の授業を行っている。通常であれば，第1クォーターの「英語Ⅰ」（スピーキング）から順に，第2クォーターの「英語Ⅱ」（リスニング），第3クォーターの「英語Ⅲ」（ライティング），第4クォーターの「英語Ⅳ」（リーディング）の4科目を開講している。（それぞれ1単位；週2回，8週，全15回）教育の質保証の一環として，統一シラバス，統一教科書，統一評価方法を取り入れ，教員間の指導上の差異を最小限にするように取り組んでいる。今回のコロナ禍においては，このような統一教育方針が功を奏し，各教員の判断と個別対応に任せることなく，英語教育センター全体としての組織的体制で，対応にあたることができた。

3. 前学期の授業開始に向けた準備と対応

2020年3月上旬に全国に緊急事態宣言が発せられ，英語教育センターでは，3月下旬より新型コロナウイルス対応のための緊急対策チームを立ち上げ，授業方針案の検討を行った。（表1）緊急対策チームでは，学生と教職員の健康と安全を守りつつ，学習の機会を提供するため，どのような授業方針で，どのような感染予防対策をとる必要があるのかを検討した。

この時，特に重要な課題となっていたことは，発話活動が授業の根幹となる第1クォーターの「英語Ⅰ」（スピーキング）をどのように行うのかということであった。対面授業を行うと感染の危険性が高まる可能性があり，また，オンラインで実施する場合，担当教員が同期型の授業プラットフォームに慣れる時間が十分に取れないことが予想された。そこで，発話活動を極力避け実施することが可能で，遠隔授業に切り替わった場合も，本学のLMS（Learning Management System）であるMoodleを活用した非同期型授業で対応可能と思われる「英語Ⅱ」（リスニング）と「英語Ⅲ」（ライティング）を第1クォーターと第2クォーターに前倒しして実施し，「英語Ⅰ」（スピーキング）を，コロナウイルス感染が落ち着き，対面授業ができる可能性が見込める第3クォーターに実施するようスケジュールの変更を行った。（表2）

その後4月上旬に，大学全体の方針及び共通教育の実施方針が発出され，対面授業を全学的に中止し，全ての授業を同期型か非同期型，またはその組み合わせによる遠隔オンライン授業に切り替えるという方針が出された。英語教育センターの緊急対策チームでは，「英語Ⅱ」のすべての担当教員が利用できる，共通のMoodleコースのテンプレート作成に取りかかった。この準備と並行して，新型コロナウイルス対応の特別授業方針と授業ガイドラインを作成し，課題の出し方，解答の開示やフィードバックの仕方，評価の仕方など特別対応の詳細を，担当教員に周知徹底した。さらに，英語でのMoodle操作マニュアルを作成して，全教員に配布し，Moodle操作講習会をセンター独自に開催した。

これらの準備を経て4月22日よりオンライン授業が開始されたが，5月下旬には，第2クォーターも遠隔授業を継続することが決定した。これに伴い緊急対策チームでは，「英語Ⅲ」についても，共通のMoodleコース及び授業ガ

[1] 執筆担当：折本　素，中山　晃，長崎　睦子，三浦　優生

表１　前学期授業実施に向けた全学及び英語教育センターの動き

時期	全学の方針等	英語教育センターの対応
3 月 26 日		「英語」科目の実施順序の変更等について授業担当教員へ通知
3 月 27 日		「英語Ⅱ」対面授業の実施方法について授業担当教員へ通知
3 月 31 日	4 月 8 日～ 21 日の休講が決定「令和 2 年度前学期授業開講に関する方針」	休講期の対応を追加
4 月 1 日		前学期教員オリエンテーションを開催し，新型コロナウイルス感染対策を徹底した対面授業方針を説明
4 月 6 日		Moodle による「英語Ⅱ」全面遠隔授業への変更を教員へ通知
4 月 7 日		Moodle による「英語Ⅱ」授業方針を担当教員へ送付
4 月 8 日	第 1 クォーターの遠隔授業が決定「令和 2 年度前学期の開講方針」	Moodle による「英語Ⅱ」遠隔授業実施を学生に通知
4 月 14 日		「英語Ⅱ」Moodle コースの準備完了
4 月 15 日		「英語Ⅱ」Moodle 操作マニュアル英語版を担当教員に送付
4 月 17 日，20 日		教員向け Moodle 講習会の実施
4 月 22 日	第 1 クォーター授業開始	
5 月 18 日	第 2 クォーターの遠隔授業継続が通知「令和 2 年度前期の授業改稿方針」	
6 月 2 日		Moodle による「英語Ⅲ」遠隔授業方針を担当教員へ通知
6 月 3 日		「英語Ⅲ」Moodle 操作マニュアル英語版を担当教員に送付
6 月 5 日		「英語Ⅲ」オリエンテーション及び Moodle 操作講習会を開催
6 月 9 日		「英語Ⅲ」Moodle コースの準備完了
6 月 11 日	第 2 クォーター授業開始	

表２　新型コロナウイルス感染症対応前後の実施順序と形態

クォーター	従前（対面実施）	2020 年度	2020 年度の実施形態
第 1	「英語Ⅰ」（スピーキング）	「英語Ⅱ」（リスニング）	Moodle（非同期型）
第 2	「英語Ⅱ」（リスニング）	「英語Ⅲ」（ライティング）	Moodle（非同期型）
第 3	「英語Ⅲ」（ライティング）	「英語Ⅰ」（スピーキング）	対面 & Moodle（非同期型）または Zoom（同期型）& Moodle（非同期型）
第 4	「英語Ⅳ」（リーディング）	「英語Ⅳ」（リーディング）	対面 & Moodle（非同期型）または Zoom（同期型）& Moodle（非同期型）

イドラインを作成するとともに，教員オリエンテーションを開催し，授業開始までに準備を整えた。

学生に対しては，Moodle での非同期型遠隔授業になることを修学支援システムのメッセージで知らせ，Moodle での学習方法を周知した。また，このような重要な通知は，担当教員からそれぞれのクラスの学生に送付してもらうだけでなく，英語教育センターからも，重ねて一斉送信することで，情報の周知に努めた。これらはすべて，1 年生全員が受講する必修科目「英語」を複数の教員で提供する英語教育センターが，組織として教育の機会提供と質の保証を行うための，緊急対応であった。

4. 前学期の授業実践

4.1　第 1 クォーター：「英語Ⅱ」（非同期型遠隔授業）

4.1.1　課題と実践

第 1 クォーターの「英語Ⅱ」（リスニング）は，下記の 2 つが主たる課題であった。

①遠隔授業を経験したことがない教員も含め全員が使える授業プラットフォームを用意する。

②遠隔授業に慣れていない学生が可能な限り不利益を被ることがないようにする。

これらに対応するために，緊急対策チームの中で，既に Moodle を活用した経験を有している教員が中心となり，全 15 回分の課題と，その課題の提出方法，解答などを組み込んだ Moodle コースの共通テンプレートを作成し，すべての教員が利用できるようにした。コースには，授業方針や Moodle での学習の進め方，成績評価方法などについて学生向けの説明を加えた音声付きスライド動画（「英語Ⅱ」授業ガイダンス）を掲載した。授業実践の概要は，表 3 にまとめた通りである。

学生には，Moodle 上で，各回の説明を読み，教科書のリスニング問題を解き，課題をアップロードするという活

表３　第１クォーター「英語Ⅱ」における授業実践

項目	概要
初回ガイダンス	Moodle 上で，センター長による挨拶，授業方針や Moodle での学習の進め方，課題の提出方法，成績評価方法の説明を動画配信した。また，課題提出のためのファイルサイズの縮小方法について説明文書を共有した。
学習方法	Moodle 上で，各回で参照すべき教科書のユニットについて指示や説明を掲示した。 その他，各教員が，リスニング力向上のためのコンテンツや，練習問題の正解を導くためのアドバイスを，Moodle や修学支援システムのメール機能から追加した。
提出課題	教科書出版社からダウンロードした音声を聞いて教科書の問題に答えを書き込み，指定のページを写真に収め（最大 500KB），Moodle にアップロードするよう指示した。 各教員は，担当学生の進捗を確認しながら，適宜，学習継続を促す指示を出し，締め切り後に解答を開示した。
期末テスト	第３クォーター初回授業でマークシート式リスニング試験を実施した。
成績評価	提出課題 60%，期末テスト 40% で評価した。

動を主に課した。課題の提出方法については，ファイルの形式やサイズを細かく設定した。理由としては，2020 年度は，英語の授業のみならず Moodle の全学的な利用がみられ，一斉アクセス及び大容量ファイルのアップロードで，学内の Moodle サーバーに負荷をかけないようにする必要があったためである。ファイルの変換や縮小方法についてはマニュアルを作成し Moodle 上に掲載した。

教員には，3 節で挙げた通り，Moodle の操作マニュアルや講習会を通して，あらかじめ基本的な操作を学んでもらった。学期中は，学生の課題提出状況の定期的な確認と，解答の開示やフィードバックを，Moodle 及び修学支援システムのメール機能を使って行うように周知した。学生にも，教員への連絡や授業・課題内容についての質問は，すべて Moodle に設けたフォーラムや修学支援システムを使うように指示し，情報伝達手段が混乱しないように周知した。

成績評価は，提出課題と期末テストに基づいてなされた。課題については，合計 10 回の提出を行えば，自宅学習の成果として，その正解・不正解の結果によらず，授業評価の 60%（100 点満点の 60 点まで）を与えることとした。提出に遅れが出ている学生には，メールなどで通知をし，多少期限を過ぎても課題を完了させるよう，各教員に指導を求めた。これは，教員にもクラスメートにも会うことなく，自宅での自主学習を行うことになる新入生に対して，学習継続意欲を失うことがないよう，可能な限り丁寧なサポートをするためであった。期末テストは，マークシート方式のリスニングテストで，対面授業が可能となる時期まで，実施時期を延期した。結果的には，第３クォーター「英語Ⅰ」初回の授業（10 月第１週）でこの期末テストを実施し，この結果を成績の 40% とした。

4.1.2　取り組みの結果

Moodle というプラットフォームで，説明，課題提出，解答開示などを含む，共通のテンプレートを仕上げたことにより，情報共有やサポートが行いやすかったため，教員にも学生にも大きな混乱は報告されなかった。さらに，学期が進むにつれ，教員は Moodle の使い方に慣れ，次第に，独自の活動またはリソースを各自の Moodle コースに付け加え，学生の理解を高める工夫ができるようになった。また，前述の通り，教員は学生が遠隔授業から遠ざかることのないよう活動の進捗を追い，こまめに連絡をとるよう心掛けた。結果として，「英語Ⅱ」の成績評価で「不可」あるいは「評価しない」として不合格となった学生の割合は，表４が示す通り，全体の 1.2% であり，過去３年間（2016 ～ 2019 年度）の水準と比較して，やや低く抑えることができた。本科目の実施が年度初めに開講されたことや，成績評価方法に変更を加えたことが影響している可能性があるものの，「英語Ⅱ」実施にあたり直面した２つの課題には概ね対応できたと言えよう。

表４　年度ごとの各科目における不合格（不可，評価しない）の割合

年度	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ	英語Ⅳ
2020	1.6%	1.2%	3.7%	4.7%
2019	1.0%	1.8%	1.3%	4.1%
2018	0.7%	2.6%	3.2%	5.6%
2017	1.1%	3.3%	4.0%	5.0%

4.2　第２クォーター：「英語Ⅲ」（非同期型遠隔授業）(注 1)

4.2.1　課題と実践

第２クォーターの「英語Ⅲ」（ライティング）は，下記の２つの課題を掲げ，対応に取り組んだ。

①パラグラフ・ライティングという英作文の技法を，Moodle による非同期型授業でも習得できるように工夫を施す。

②学生へのフィードバックの質と密度をさらに高めて，Moodle による非同期型授業の質の向上を図る。

「英語Ⅲ」は，パラグラフ・ライティングという英作文指導に焦点を当てた授業である。第１クォーターに引き続き，授業はMoodleを利用した非同期型とした。今回も，前述の緊急対策チームが，すべての教員が利用できる共通テンプレートを用意し，全15回分の指示と課題，解答などをMoodleコースに組み込んだ。第２クォーターにおける授業実践の特徴は，表５にまとめた通りである。

本科目のオンライン授業で，新たに取り入れた工夫は２点ある。１点目は，音声付きパワーポイントスライドによる講義動画を付加したことである。ほとんどの新入生にとって初めて学ぶことになるパラグラフ・ライティングという技法について，Moodleによる授業でも，教室での対面授業と同程度の理解を得られるようにするためであった。２点目は，提出課題とそのフィードバックに対する工夫である。「英語Ⅱ」と同様に教科書の問題に取り組むことに加え，今回は新たに，英作文を提出するよう求めた。そして，学生へのフィードバックの質と密度を高めるために，この課題について，可能な限り，個別の添削指導をするよう教員に指示した。

期末テストは，指定されたテーマについて，８文で構成される英文パラグラフを書いて提出させる内容であった。例年は，教室で制限時間内に１つのパラグラフを完成させるが，今回は自宅などで，内容の違うテーマで２回，パラグラフを作成し提出させた。教員は，統一のライティング評価ルーブリックを用いて，採点を行った。すべての教員が統一の基準を用いて評価するというのは，英語教育センターの特筆すべき取り組みの一つであるが，今回は，既存のルーブリックを，2020年度用に特別改定して使用した。

4.2.2　取り組みの結果

「英語Ⅲ」では，第１クォーターのような，きわめて限られた時間での初期対応と異なり，ある程度，準備期間が取れたことで，Moodleの活用に発展的工夫を行うことができた。今回新たに追加したパラグラフ・ライティングに関する講義動画については，学生からも学習の理解を深める役に立ったとの評価を受けた。また，新たに設けられた英作文の課題に関しては,「令和２年度新入生夏季アンケート調査」(注2) において，教員からのフィードバックが学習の意欲を向上させたという肯定的コメントが寄せられた。

このような好結果につながった要因として，英作文という学習内容がMoodleでの指導に適していたことも挙げられるが，やはり，一人で最大５クラスを担当する状況で，可能な限り学生へフィードバックを施した担当教員の貢献は大きい。さらに，各教員が，第１クォーターでMoodleの機能の使い方を修得したため，課題提出のコメント機能を使うだけでなく，フォーラム機能を利用して学生同士（あるいは教員も含めて）の活動をさせたり，学生の英作文の添削例をまとめてWordファイルでアップロードし公開したりするなど，様々な工夫を行えるようになった成果でもある。また表４が示す通り，「英語Ⅲ」で不合格となった学生の割合は3.7%であり，過年度と比べ大きな増減はなかった。以上，本科目で掲げた２つの課題に対応すべく，講義動画や添削付き課題を導入し，各教員が発展的な活用を行ったことによって，例年並に，学生が学習目標を達成することができた。

5.　後学期の授業実施に向けた準備と対応

第１及び第２クォーターは，学生と教職員の新型コロナウイルス感染予防を最優先としながら，学生への教育機会を保証することを目標として，非同期型遠隔授業を実施し，この期間の英語教育センターの取り組みに対しての満足度は高いことがうかがえた。一方，前述の「令和２年度新入生夏季アンケート調査」の結果で，「７月以降も大学にほぼ来ていない」，あるいは，「月１～２回程度しか来ていない」という新入生が多いことが判明した。また，授業担当

表５　第２クォーター「英語Ⅲ」における授業実践

活動	概要
初回ガイダンス	Microsoft Stream（Moodleからリンク）から，授業方針やMoodleでの学習の進め方，課題の提出方法，成績評価方法などを動画配信した。
学習方法	Microsoft Stream（Moodleからリンク）から，講義動画を９本配信した。 Moodle上で，各回で取り組むべき教科書のユニットについて指示や説明を掲示した。 その他，各教員が，ライティング力向上のためのコンテンツや，練習問題の正解を導くためのアドバイスを，Moodleや修学支援システムのメール機能から追加した。
提出課題	Moodle上で，①教科書の問題を解き，指定のページを写真に収めてアップロードすること，②英作文をオンラインテキストまたはWordファイルで提出すること，の２つを課題とした。 各教員は，担当学生の進捗を確認しながら，適宜，学習継続を促す指示を出した。そして，①に対しては提出締め切り後に解答を開示した，②に対しては，個々の添削や，全体への包括的フィードバックを行った。
期末テスト	指定されたトピックでパラグラフを２つ作成し，Moodleからファイルを提出した。
成績評価	提出課題60%，期末テスト40%で評価した。

教員やクラスメートと会う機会もないまま，自宅での遠隔学習を続ける中で，精神的に深刻な悩みを抱えている学生がいるという情報も把握された。

このような大学生の実情は全国的にも共通するもので，文部科学省大臣による10月16日の記者会見などに示唆されている通り，キャンパスでの対面授業提供の必要性が大学に問われることとなった。表6が示すように，愛媛大学では，新型コロナウイルス感染が比較的沈静化された状況を踏まえて，遠隔授業の活用を継続しつつ，感染予防を徹底して教室での対面授業を可能な限り実施することとなった。英語教育センターでは，これらの方針に従い，センター独自のより厳格な感染予防対策と特別な授業形態で，教室での対面授業を開始した。また，Moodleを用いた非同期型の授業も継続し，これらを併せて行うハイブリッド方式を採用した。（表2）

なお，遠隔での授業を希望した教員は，対面授業の代わりにZoomを利用した同期型授業を取り入れた。教室で対面授業を実施する教員も，状況の変化に応じて，いつでも遠隔授業に切り替えられるよう，第3クォーターが始まる前までに，英語版のZoom操作マニュアルを作成して配布するとともに，講習会を開催して基本的操作を説明した。

第4クォーターに入ると，再び感染の拡大が懸念されるようになり，大学入学共通テストに備え，1月以降はすべての授業が遠隔形式に移行された。その後も感染の状況は改善されることなく，遠隔授業は第4クォーター終了まで継続した。

表6　後学期授業実施に向けた全学及び英語教育センターの動き

時期	全学の方針等	英語教育センターの対応
8月6日	授業の開講方針は9月1日のBCPレベルに拠る旨を通知「令和2年度後学期の授業について―基本的考え方―について」「令和2年度第3及び第4クォーターにおける共通教育科目の開講方針について」	
9月2日	授業の開講方針を発表。「英語」は対面授業の対象科目となる。「令和2年度後学期（第3クォーター期間）の授業について」	
9月8日		後学期教員オリエンテーションを実施し，徹底した感染対策を施した対面授業とMoodleによる遠隔授業のハイブリッド方式での授業方針を教員に説明（対面授業に代わりZoomによる遠隔授業も選択可）
9月10日		教員用Zoom操作マニュアル英語版を教員に送付
9月11日，18日		教員向けZoom講習会を実施
9月11日		「英語Ⅰ」対面授業方針を学生に通知
9月24日		学生用Zoom操作マニュアルを学生に送付
9月30日		「英語Ⅰ」をZoomで実施するクラスについて，教員へガイドラインを送付，学生へ注意事項を送付
10月1日	第3クォーター授業開始	初回授業で「英語Ⅱ」期末試験を実施
10月21日	授業の開講方針を発表。「英語」は対面授業の対象科目となる。「令和2年度後学期（第4クォーター期間）の授業について」	
11月11日		「英語Ⅳ」を徹底した感染対策を施した対面授業とMoodleによる授業のハイブリッド方式で実施する授業方針を教員に通知（対面授業に代わりZoomによる遠隔授業も選択可）
11月25日		「英語Ⅳ」対面授業方針を学生に通知
12月4日	第4クォーター授業開始	
12月9日	1月7日～14日までの授業の遠隔化が決定「大学入学共通テストの円滑な実施のための特例措置」	
1月6日		教員用Zoom操作オンライン個別相談会を実施
1月7日		すべての対面授業が遠隔形式（Zoom）に移行
1月14日	第4クォーター終了まで遠隔授業の続行が決定「授業に関する緊急通知」	

6. 後学期の授業実践

6.1 第３クォーター:「英語Ⅰ」(同期・非同期併用型ハイブリッド授業)(注3)

6.1.1 課題と実践

第３クォーターの「英語Ⅰ」(スピーキング)は，以下の課題に対応すべく準備にあたった。

①感染拡大防止対策を徹底し，クラス形態を工夫することにより，教室での対面授業を提供する。

②感染拡大状況により，教室での授業が急遽中止になった場合も，学生が可能な限り不利益を被ることがないようにする。

これらに対応するため，原則として，換気や消毒といった，大学で定められた感染予防対策を徹底するとともに，センター独自の対策を施し，対面授業を再開した。これにMoodleによる非同期型も組み合わせることで，ハイブリッド方式の授業とした。授業実践の特徴を表７にまとめる。

対面授業を実施する上での大きな変更点は，１クラス（最大35人）を２つのグループに分け，教室内の人数の上限を抑えたことである。その理由は，先述の通り，「英語Ⅰ」ではスピーキング能力の養成をするため，発話練習が授業の中心的活動となるためである。全15回の授業のうち，第1，14，15回を除く計12回の授業を，各グループが交代で，教室で受講するようにした。なお，遠隔授業を希望した教員は，第２回目以降はZoomでの授業を行った。

この変更に伴い，対面授業の回数が半減することから，必須として扱う教科書の範囲は必要最小限に縮小し，授業の進度や内容は各教員に委ねた。受講者に新型コロナ感染者が発生した場合に備え，各授業において誰がどこに座っていたのか把握できるよう，座席を指定した。授業中のペア活動は，原則，座席を移動しない範囲で実施することとし，発話も大声で行わないよう指導した。教員の机間巡視もなるべく行わないようにした。

対面もしくはZoomによる授業のない回は，そのグループはMoodleで出された課題に，自宅などで取り組んだ。Moodleコースについては，前期とは異なり，各教員が教材や課題などのコンテンツを準備した。課題は，教科書を利用して出されるのが原則であるが，その内容が授業目標に合ったものであれば，教員各自の判断のもとに作成された。

期末テストは，第14～15回の授業時に２グループに分けて実施した。テストの内容は，学生同士がペアで会話を行うもので，教員は例年と同じスピーキング評価ルーブリックを用いて評価した。成績評価方法については例年通りの項目を用い，課題や小テスト，参加態度，期末テストをもとに判定された。

6.1.2 取り組みの結果

「英語Ⅰ」では，各回の受講生の人数を減らし，教室の収容定員の２分の１から３分の１程度にすることで，学生が発話活動を行うときの間隔を２メートル以上空けることが可能となった。遠隔授業を行うことも選択可能であったが，結果として全クラスの約90%が教室で，約10%がZoomを利用して授業を行った。外国人に対する入国制限により，日本に渡航できなかった留学生も，Zoomクラスで対応することができた。

授業を受けた学生の反応としては，多くの新入生にとって，入学して初めて体験する本格的な教室での授業であったためか，学期末の授業評価アンケートの自由記述欄に，クラスメートと実際に会ってコミュニケーション活動をし，英語での会話のスキルを高められたこと，友人関係を築くことができたことを，好意的に高く評価したコメントが多く寄せられた。

また，不合格となった学生の割合は1.6%であり，例年と同水準に抑えられた（表4)。「英語Ⅰ」では，大半の学生にとっては新しい学習項目だと思われる，英語コミュニケーションに必要なスキルやストラテジーを学ぶが，教室やZoomでの授業を組み合せたことで，学生が直接これらを意識し会話練習ができたことや，授業参加への高いモチベーションが保たれたことが，理由として考えられる。

以上の結果から，「英語Ⅰ」では，当初掲げた課題に対

表７　第３クォーター「英語Ⅰ」における授業実践

項目	概要
初回ガイダンス	対面にて，授業に関する重要事項を各教員が説明した。
学習方法	第２回目以降，２グループに分かれ，同期型授業（対面もしくはZoom）と自宅学習（Moodle）を，交互に実施した。 自宅学習は，各教員がMoodleコースを組み，スピーキング力向上のためコンテンツや，練習問題の正解を導くためのアドバイスを与えた。
提出課題	各教員が，同期型授業のための予習復習などの課題のほかに，自宅学習用にMoodle上で提出できる課題を与えた。
期末テスト	対面もしくはZoom上で，ペアになって行う会話のテストを実施した。
成績評価	例年通り，課題や小テスト40%，参加態度30%，期末テスト30%で評価した。

応し，遠隔移行のケースも想定しながら，対面による学習機会をより多く提供することができた。また初の試みとなるZoomを使用した同期型授業を導入することにより，遠隔でも学生同士の交流や共同学習の機会を担保することができた。

6.2　第４クォーター：「英語Ⅳ」（同期・非同期併用型ハイブリッド授業）

6.2.1 課題と実践

第４クォーターの英語Ⅳ（リーディング）は，第３クォーター同様に，以下の２つの課題に取り組んだ。

①感染拡大防止対策を徹底し，クラス形態を工夫することにより，教室での対面授業を提供する。

②感染拡大状況により，教室での授業が急遽中止になった場合も，学生が可能な限り不利益を被ることがないようにする。

「英語Ⅳ」は，基本的に５つのパラグラフで構成された英文を読解するためのスキルに焦点を当てた授業である。第３クォーターの「英語Ⅰ」から大きく追加・変更された点はなく，１クラスを２分割し，教室またはZoomでの授業と，Moodleによる自宅学習を組み合わせた，同期・非同期併用型ハイブリッド形式で実施した。対面授業では感染防止対策を引き続き徹底し，自宅学習では各教員がMoodleコースのコンテンツを作成し，指導を行った。遠隔を希望する教員はZoomを用いた同期型授業を行ったが，そうでない教員も遠隔授業への全面移行を想定し準備を進めた。授業実践の特徴は，表８にまとめる。

期末テストについては，感染拡大状況の悪化を想定し，特別な対応が求められた。教室で実施できる場合は，英語教育センターが独自に作成したマークシート式テストを，第14回，第15回の授業時に２グループに分けて実施することとした。一方，教室での実施ができない場合には，自宅などからオンライン受験が可能な外部試験であるGTEC Academicを利用することとした。学生にはあらかじめ，この試験の説明文書と受験マニュアルを送付した。実施時期については，第４クォーター「英語Ⅳ」開講前の11月30日～12月３日及び開講中の１月25～１月29日を設定し，合計２回の受験機会を与えた。第１回目の受験結果は成績には含まれないが，学生はオンライン受験の手続きに慣れ，出題問題形式を確かめることができた。第２回目の受験結果は，授業が遠隔化された場合に，成績の30%として扱うこととし，これをあらかじめ周知した。結果として，５節の通り，１月７日より全面遠隔授業に切り替わったため，GTEC Academicを期末試験として扱った。

6.2.2　取り組みの結果

第４クォーターは，全クラスの約80%が教室で授業を行い，残りの約20%がZoomで行うこととなった。第３クォーターより遠隔での授業の割合が高くなったのは，冬場に入り新型コロナウイルスの感染拡大が予想される中で，予防的に，最初から遠隔授業を選択した教員が増えたためである。「英語Ⅳ」はリーディング指導の授業であるため，Zoomでも十分，必要な学習活動ができるとの判断もあったからであろう。

前述の通り，１月７日より，全学的に対面授業が遠隔授業に切り替えられた。英語教育センターでは，第３クォーター，第４クォーターの開始前に，Zoomでの遠隔授業に切り替えることを想定した準備を行っていたため，スムーズに移行できた。また，期末テストは，自宅受験が可能なオンライン試験を利用し，学生には第４クォーター開始前にも予備受験をさせるなど，情報周知や準備を徹底したため，大きな混乱はなく無事に実施することができた。成績評価については，不合格となった学生の割合は，過年度と同水準であった。（表４）以上の結果から，第４クォーターでは，状況の変化に伴い遠隔授業への移行を迫られたものの，２つの課題に十分に対応できたと言えよう。

表８　第４クォーター「英語Ⅳ」における授業実践

項目	概要
初回ガイダンス	対面にて授業に関する重要事項を各教員が説明した。
学習方法	第２回目以降，２グループに分かれ，同期型授業（対面もしくはZoom）と自宅学習（Moodle）を，交互に実施した。１月７日以降は，同期型授業はZoomに全面移行した。 自宅学習では，各教員がMoodle上で，読解力向上のためコンテンツ，あるいは，練習問題の正解を導くためのアドバイスを与えた。
提出課題	各教員が，同期型授業のための予習復習などの課題のほかに，自宅学習用にMoodle 上で提出できる課題を与えた。
期末テスト	マークシート式の試験の教室受験を予定していたが，（遠隔化に伴い）実施しなかった。 GTEC Academicを２回オンライン受験させ，２回目を期末テストとして扱った。
成績評価	課題や小テスト40%，参加態度30%，期末テスト（GTEC Academic）30%で評価した。

7. 合理的配慮を必要とする学生への対応

聴覚障がい，発達障がいなどの理由で合理的配慮を必要とする学生に対しては，英語教育センターで対象学生全員の情報を把握し，依頼事項に対して協議の上，活動内容の振替や個別指導を行うなどの対応を行った。対面授業が再開した後学期においては，聴覚障がい学生への支援者が教室に入ることが不可能であったため，遠隔によるクラスを特別に編成し，障がい学生支援の経験を持つ教員が授業を担当した。個々に異なる障がい特性への配慮と，授業の遠隔化という，2つの条件が重なったため，バリアフリー推進室と連携しながら，活動内容を適宜修正し，学生の学習機会を保障すべく可能な限り対応した。バリアフリー推進室のスタッフに感謝を申し上げたい。

8. まとめと今後の課題

以上，英語教育センターでは，新型コロナウイルス感染症対策として，授業の開講順序の入れ替え，授業方針や形式の変更，遠隔授業のセットアップなど，様々な組織的対応に迫られた。中でも，教員間，教員と学生との間のコミュニケーションについては，その重要性を意識し対応にあたった一方で，問題点や課題も見出された。以下，2020年度の授業実践から得られた知見を項目ごとにまとめ，今回の取り組みの成果と課題を，今後の授業運営，学習指導に生かせられるよう整理する。

8.1　情報の周知徹底

英語教育センターのように，複数教員が同時期に同一科目を教えている場合は，担当教員及び受講学生全員に，授業方針や折々の必要な情報を周知徹底することが重要である。教職員向けの全学的な重要情報は，速やかに英語訳を作成し教員に送付した。学生向けの英語授業や試験に関する重要な情報は，英語教育センター事務室から，教員と学生に発信するとともに，同じ情報を各教員から，担当するクラスの学生にも通知してもらうことで，情報の周知に努めた。しかし，今回のように状況が変わる度に，方針を変えなくてはならなくなり，次々に情報更新の通知をすることにより，教員・学生ともに混乱を来たしていた可能性がある。伝えなくてはならない情報を厳選するとともに，Moodleコースの機能や，大学が契約しているクラウドストレージを利用するなどして，情報の伝達や整理の方法を，さらに工夫する必要がある。

8.2　遠隔授業における指導及びフィードバック

前学期に採用したMoodleによる非同期型の遠隔授業に関しては，教員と学生間の双方向性を保ちにくいという側面から，学生が自宅学習で孤立し，授業についていけなくなることが懸念された。これを避けるため，提出が遅れがちな学生には，担当教員だけでなく，英語教育センター事務室からも職員が連絡をして，学習継続を促した。また，教員には，学生に可能な限り丁寧なフィードバックを行うよう依頼した。学生への個別対応で教員にかかる負担は大きいものであるが，今回は緊急対策チームが共通のMoodleコースを整備し，諸々の全体作業を引き受けることで，教員が個々の進捗確認や指導に注力できたと考えられる。こういった体制は今後の授業運営にも活かすことを検討できるだろう。

後学期に導入したZoomによる同期型の遠隔授業に関しては，基本的な機能を事前に説明したが，授業をどのように運営するかは，各教員に任された。同期型遠隔授業は次年度以降も継続する可能性が見込まれるため，今回実践した活動案やトラブル事例などについて，情報を集約し共有することは，今後の授業改善のためにも重要である。また，次年度はZoomとは異なるビデオ会議システムへの切り替えも検討されているため，ICTスキルや経験の乏しい教員や学生がいたとしても混乱が生じないよう，引き続き組織的支援が求められる。

8.3　対面授業における感染拡大防止に配慮した活動の工夫

後学期より再開した教室での対面授業では，学生間の交流の機会を提供できたものの，感染予防を優先して学生の座席を固定したため，ペアやグループでの活動において，1回の授業の中で自由に組み合わせを変えることができなかった。また，全学の方針に沿って教員も机間巡視を控えたので，個別の丁寧な指導をすることが難しい状況であった。ペアやグループ学習の成果を全体発表させ，それに対して教員がフィードバックを与えたり，クラスメート同士でコメントを交換したりするなど，交流を活性化させるための検討と工夫が必要であろう。遠隔授業と同様，各教員が教室で行った取り組みや工夫を共有し，次年度の対面授業に活かしていくことが期待される。

8.4　ポストコロナ社会を見据えた授業改善

新型コロナウイルスが収束しても，完全に以前の状態に戻ることはないであろうと言われており，ウィズコロナの新しい学習方法を考えなければならなくなる。英語教育センターでは，2020年度の1年を通して，コロナ禍での授業形態を模索し発展させてきたが，その経験を活かし，今後も同期・非同期型授業を組み合わせることにより，学生同士，学生と教員とのインタラクティブな授業を実践していくことが望ましい。先述の通り，本学共通教育の英語科目は統一の教育方針のもとで実施していることから，非同期型プラットフォームを共通基盤として，学習教材を作成し配信したり，課題提出の管理システムを整備したりする

ことも可能であろう。それによって，教員がより細やかなフィードバックに時間や労力を割くことができ，同期型授業では，学生による共同学習の機会を増やすなど，反転型の授業の要素を取り入れることも期待される。今後は，同期型授業と非同期型自宅学習を組み合わせた新たな授業形態にふさわしい，カリキュラムや教材の開発が必要となるであろう。

脚　注

注 1：この取り組みは，JACET 中国・四国支部研究紀要 18 号（2021 年 3 月刊行予定）に『Moodle を利用したオンラインによる非同期型のパラグラフ・ライティング指導』というタイトルで，概要が掲載される予定である。

注 2：このアンケートは，教育学生支援機構教育企画室が，平成 2 年 7 月 27 日から 8 月 28 日にかけて，新入生 1,827 人に対して，ウェブアンケート形式にて実施した。1,295 人が回答した（回答率 70.9%）。

注 3：この取り組みは，JACET 中国・四国支部研究紀要 18 号（2021 年 3 月刊行予定）に『同期型（教室または Zoom）と非同期型（Moodle）を組み合わせたスピーキング指導』というタイトルで，概要が掲載される予定である。

謝　辞

本稿で紹介した第 2 クォーターの「英語Ⅲ」における取り組みは, 令和 2 年度（2020 年度）学長特別賞（教育分野）を受賞した。本取組に関わった教職員の多大な協力と貢献に感謝申し上げる。